

お姉さんのホームステイ(仮)

○リビング

姉「それでは、しばらくよろしくお願いします」

母「良いのよ、全然遠慮しないでね」

姉「…よろしくね」

僕「う…うん」

この人は親戚のお姉さん…らしい。と言っても、ほとんど会ったことがないのであんまり記憶にない。普段は寮に住んでるらしいけど、工事でしばらく住めなくなったらしい。実家は遠方らしく、お母さんの提案でうちに泊まりに来たらしい。らしいばかりなのは、全部今聞いたばかりで僕もよく知らないからだ

姉「キミのお母さんには昔からよくして貰ってるんだよ。今回のこともそう。急におしかけてごめんね」

僕「別に良いけど…」

姉「キミのことも、ちっちゃい頃から知ってるよ。お風呂も一緒に入ったんだよ、覚えてなご〜」

僕「お、覚えてないよ」

母「そうだ、疲れたでしょ？ご飯食べる前に、先にお風呂入っておいで」

姉「良いんですか？それじゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」

母「あんたは、良いよね？」

僕「別に僕はどうでも良いよ」

姉「うふふ、キミも一緒に入る？」

僕「は、は、入らないよ！宿題やってくる！」

姉「…うふふ。かわいい」

○お風呂

姉「…ません…けど…」

お風呂の方から声が聞こえる。お姉さんの声だ。僕の部屋には聞こえるけど、リビングのお母さんには聞こえてないらしい

僕「どうしたんだろう。お母さん呼んでこようかな」

姉「あ…おーい…誰かいる？」

僕「あ、うん。何か用があるなら、今お母さんと呼んで…」

姉「あ、だいじょーぶだよ。キミで良いよ。その、トリートメント借りようと思ったんだけど、切れてるみたいで…」

僕「あ、そうなんだ。僕使わないからよくわかんなくて…」

姉「私のポーチの中に入ってるから、取ってもらえるかな？泊まる用に持って来たトートバックの中に猫のポーチがあるから、持って来てくれる？あ、バックはリビングに置いてあるの」

僕「わかった。ポーチごと持ってくれば良いかな」

姉「うん。お願い」

僕「ええと、お姉さんの荷物は…」

○リビング

…とはいえ女の人だし、お母さんに持っていってもらった方が良さうな。事情を伝えて持っていつてもらおう

母「…なるほど。急だねそれは。また明日確認するけど、現状は…」

仕事の電話中だ。このモードの時のお母さんには話しかけられない…仕方ない。これか。猫のポーチ…

○浴場

僕「持って来たよ」

姉「ありがと〜助かる〜。身体、濡れちゃってるから持って来てくれる？」

僕「えっ!？」

僕「思わず変な声を出してしまった」

姉「髪も洗った後だから…お願いしても良いかなあ？あ、ポーチのまま渡してくれて良いよ」

僕「わ、わかった…開けて良いの？」

姉「おっけ〜」

恐る恐る扉を開ける。

姉「うふふ、ありがと」

僕「!」

思った以上に近い距離にお姉さんが立っていた。

姉「最初から持ってくればよかったね。反省…ん？どつしたの？」

僕「な、なんでもない！じゃ、じゃあね」

姉「ありがとね」

女の人の裸…初めて見てしまった。興味本位で、インターネットなんかでは見たことあるけど…。胸…だよな、あれ。見たの、バシてないかな…。

でも、お姉さん何にも思わなかったのかな。まあ、そもそも、男の人と思われてないのか…。

…トキトキが止まらない。

○リビング

姉「ごちそうさまでした〜おいしかったです！寮の食事と段違いー！」

母「あらまあ、寮のご飯は美味しくないのかしら」

姉「んー美味しくないことはないんですけど…なんと言っか、味より量？って感じです」

お風呂場の出来事で頭がいっぱいな僕。楽しそうに話すお姉さんを見ても、さっきの裸が頭に浮かんでしまう。最低なやつだ、僕は。

母「そういえば、お部屋どうしましょうかね」

僕「お父さんの部屋で良いんじゃないの？」

お父さんは単身赴任で、今家にいない。だからこの家は今、部屋が一つ空いている。

母「そうね…私もそのつもりで泊まったら？って言ったんだけど…よくよく考えたら、年頃の女の子をお父さんの部屋に泊まらせるのも…ねえ？」

姉「私は全然…いえ…」

そう言って僕の方を見つめるお姉さん。

姉「そうですね…泊めて頂く身で申し訳ないんですけど、少し考えちゃいますね」

可哀想なお父さん。知らないところでやんわりと傷つくようなことを言われているぞ。

姉「…キミと一緒にの部屋でいいかな？」

僕「え？」

母「あら、良いの？」

姉「彼が良ければ、なんですけど。せっかくなら仲良くしたいなあとも思うので…」

母「あらまあ嬉しいわ〜仲良くしてあげてちょうだい！ね、良いわね。それに、お父さんの部屋

よりも良いでしょー！」

僕「いや、でも…」

姉「よろしくね。仲良くしましょう?」

なんて言うけど、さっきのお風呂場の出来事があったばかりなのに…。こんなドキドキした状態で一緒の部屋だなんて…。

○部屋

当然眠れるわけもない。

と言うか、お母さんもお母さんだ。お父さんの部屋はダメだと言いながら、僕の部屋は良いだなんて…。僕だって立派な男…だぞ。…いや、お母さんも、お姉さんも僕のことを男として意識していないのだろう。そりゃ、当然か。

ノックの音。

姉「入るよ〜」

お姉さんが歯磨きから戻って来た。

どうしよう。いざ一緒の部屋で過ごすとなると、どうすれば良いのか。

僕は慌ててベッドに潜り、布団に潜り込んだ。

姉「あ、もう寝てたのかな。ごめんね〜」

よくよく考えると、こう言う時はお客さんにベッドを譲るべきなんだろうか…。慌ててそこまで考えつかなかった…。僕がベッドに入っている以上、お姉さんは床で寝るしなくなる。それはさすがに申し訳ない…。

姉「よいしょっと…」

僕「!」

お姉さんがベッドの中に潜り込んできた。

姉「さてさて…本当に寝たのかなあ?」

背中に、お姉さんの体が密着する。温かく、柔らかい…。さっきのお姉さんのお風呂場での裸を思い出す。ドキドキしすぎて、死にそうだ…。落ち着け、僕。深呼吸だ。

深呼吸。息を深く吸って、吐く。…とても良い匂いだ。お姉さんの匂い…。さっき渡したトリートメントの、匂いだろうか…。さっきの…。またしてもお風呂場の出来事を思い出す。落ち着け、自分。

姉「ねえ、さっき…見てたよね」

僕「三」

姉「別に怒ってるんじゃないよ、頼んだの私だし…。ただ、気になっちゃってさ。ドキドキしたかなあって。そうだったら嬉しいなあって」

嬉しい…。？なんでだろう。でも、なんで嬉しいかなんて聞けない。聞いたら、寝たふりがバレル…。いや、もうバレてるかもしれないけど…。

姉「…本当に寝ちゃったのかな？うふふ…」

お姉さんがもぞもぞしている。

姉「結構暑いなあ、パジャマ脱いじゃおうかなあ…」

脱ぐ…ここで？ただでさえドキドキしているのに、なんでそんな…。と言っか、エアコンつければ良いのに。お姉さんに伝われ…。

姉「うふふ…」

背中の方でお姉さんがもぞもぞしているのがわかる。まさか本当に…？胸のドキドキが早くなる。心臓が爆発しそうだ…そして…僕の下の方…おちんちんも…爆発しそうだ。こんなに爆発しそうなくらい大きくなることってあるのか…。どうやったら治るのかな、これ…。とりあえず、落ち着こう…。…。ダメだ、全然ドキドキが止まらない。けど、背中の方に感じた、お姉さんの感触がなくなっている。離れてくれたのかな？

姉「…うふふ、やっぱり」

足下、布団の下の方から聞こえる。いつの間にそんなところに…。

何がやっぱりなんだろう…そう思っていると、お姉さんの手が僕のズボンに触れる。

突然触られたことに驚く、そして、おちんちんがさっき以上に硬くなる。

姉「もう、このままじゃパジャマ破けちゃうよ。大丈夫？」

僕「えっ!？」

思わず返事をしてしまった。おちんちんが大きくなると、パジャマ破れるの？そんなこと…いや、でも本当だったらお母さんになんて言えは…。

姉「このままどんどん大きくなって、破れちゃったら大変だよね。私だったらなんとかしてあげられるんだけどなあ…」

僕「…できるの？」

姉「あら、寝てたんじゃないんだ。うふふ」

僕「あ…ごめんなさい」

思わず謝ってしまう。

姉「別に謝らなくて良いよ。…ねえ、なんとかしてあげようか？」

僕「う…うん」

姉「おっけ。任せてね。じっとして、リラックスリラックス」

リラックスと言われても、全然ドキドキが止まらない。だけど、とりあえずお姉さんに任せるしかない。

姉「うふふ、怖くないよ」

そう言って、お姉さんは布団に潜り込んだまま僕のズボンと、パンツを脱がせる。

姉「そう言えば昔もキミのパンツを脱がせたことあったなあ、懐かしい。と言っても、もっとちっちゃい頃だけだね。うふふ」

布団に隠れているとは言え、すごく恥ずかしい気分だ…。でも、ズボンとパンツを脱いだので、少し苦しくなくなった。お姉さんの言う方法ってこれだったのか…。

姉「いただきます…」

そう言って、お姉さんは何かを始めた。

姉「ん…結構おつきいね…見た目は可愛いのに…ふふっ…」

おちんちんに何かされているのわかる。でも、ただ触られているだけじゃない。なんだろう、この感覚は。とても、ふわふわした気持ちになる…。

姉「ドキドキしてるね…んっ…大丈夫、全部してあげるから…んんっ…」

何かをしてくれてるみたいだけど…なんだろう…頭もぼうつとして来て、よくわからなくなって来た。

姉「…そろそろかな…んっ…んっ…」

おちんちんの方から、何かのぼってくる感じ。熱い何か、のぼって、出そうだ…!

僕「な…何か出そう…だ、大丈夫?」

姉「良いよ、大丈夫。全部、出してね」

そう言ってお姉さんは何かを続ける。おちんちに伝わる感覚が強くなる。そして、何かが出る…!

姉「んっ…んっ…んっく…うふふ。濃い…」

何かすごいことが起きたのはわかる…けど、何が起きたんだろうかわからない…。ただ、とても眠い…。

姉「大丈夫?…じゃないかな。ふふ、おやすみ」

そう言うとお姉さんは僕の頭を撫でた。ドキドキと、ふわふわの感覚のまま…僕は気が付くと眠っていた。